

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	和 暁禱
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
ライトノベルにおける「戦闘美少女」像の変容			
論文審査担当者			
主 査	教授	青木孝夫	印
審査委員	教授	桑島秀樹	印
審査委員	教授	関村 誠	印
審査委員	准教授	グラジディアン マリア ミハエラ	印
審査委員	准教授	柳瀬善治	印
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文の研究目的は、主に日本のライトノベルを対象とし、1980年代の登場からゼロ年代に及ぶ、およそ四半世紀の代表的なヒロイン像である戦闘美少女のキャラクターの分析である。この間の戦闘美少女にまつわる女性「らしさ」の変容を、とりわけジェンダーの視角から「男性視線」(Male Gaze) 概念を用いて解明する。論文は、序章終章を含め全六章で構成されている。</p> <p>序章・導入部分では、「戦闘美少女」の名称及び概念を提唱した斎藤環の著書『戦闘美少女の精神分析』（2000/2006）、アニメやゲームなどの女性キャラクターを分析する斎藤美奈子の『紅一点論』（2001）をはじめ、サブカルチャーにおける戦闘美少女像や主にライトノベルにおける女性像をジェンダーの視点で研究する先行研究を整理し、戦闘美少女登場の時代背景を分析する。</p> <p>第一章では、秋山瑞人のセカイ系ライトノベル『イリヤの空、UFOの夏』（2001-2003）を主なテキストとし、男性作家の創作する「（男性の）幻想対象」としての戦闘美少女を論じる。セカイの危機を描くストーリーや、読者層と重なる10代前半のヒロイン、イリヤと男性主人公を分析し、ゼロ年代以前の「戦う少女」の少女らしさを解明した。中学生から高校生を主要読者とする環境では、「戦闘少女」は男性読者の抱く<少女らしさ>に応じ、姿も声も性格も独自の誇張によって造形されている。ヒロインの「戦闘能力」及び戦闘は、男性読者が少女に抱く幻想を展示的に表現するためのストーリー上の道具的場面であり能力である。「戦闘美少女」は、従順、受け身、弱さなどの古典的女性表象を超えているように見えるが、依然、男性視線の類型性の枠内にある。</p> <p>第二章では、女性ライトノベル作家の紅玉いづきの「人喰い魔三部作」（2007-2009）を主なテキストとして、女性作家が「美少女像」をどのように造形しているかを論じる。彼女たちはいずれも</p>			

戦う少女であるが、戦闘場面でよりも、日常場面で振る舞う時のほうが自然で女性らしい。紅玉の描く意志の強い主体的な少女像は、男性幻想を受け容れた少女イメージであるよりも、ストーリーの展開と共に人として成長する、よりリアルな生身の「人間」として存在する。ここには、男性視線を前提としつつも、主人公の少女を、単に男性読者の視線の受け皿とするのではなく、意思を有する生身の人間として造形しようとする作家紅玉の創作意思を認めることができる。

第三章では、時雨沢恵一の『キノの旅』（2003～）を代表例として取り上げ、主人公の「性別の曖昧化」の戦略を、読者の変化と関連する表現の問題として検討する。主人公の性別「曖昧化」は、男性視線の受容ではなく、むしろ押し付けられた従来の女性らしさを越えた女性像を求める女性読者の期待に応えている。キノの人物造形は、男性の「視覚的享楽」を誘発する「戦闘美少女」像を、姿態や声や性格でも回避・克服している。この新しいヒロインは、変化する時代の動向の中で、作者の意図や読者の期待の変化を取り入れながら誕生し、商業的にも成功している。

終章では、ライトノベルと戦闘美少女の発展について展望する。異世界転生やオンラインゲーム系のライトノベルが流行するにつれ、戦闘少年同様、戦闘少女は変貌した。主人公は、古い男性視線を受け入れる少女像ではなく、独立性の高いヒロインに向かっている。その背後には、若い読者層の意識の変化があり、ライトノベル自体の成熟・進展がある。この文化構造、また社会意識を変化させ、あるいは変化に応じて発展し続ける現代の戦闘美少女の表現可能性を論じた。

評価

文学研究として、またサブカルチャー研究として、一般的なヒロイン像の分析や社会学的見地からのジェンダー分析は豊富であり、巨視的に見れば本研究は、その枠内にある。しかし、ライトノベルの中の少女像の造形の変容を、書き手、小説、読み手という創作—受容環境の力動的な構造変化と連動させて、テキスト解析を通じ動的に析出した点は特徴的であり評価できる。一章から三章まで、いずれの分析も少女像の特徴的表現を丁寧に観察し、読者の期待やストーリーとの関係性を解析している。女性像の分析に「男性視線」という分析道具だけでなく、社会学的あるいは美学的契機を含む多面的な視点からの分析を展開している。その結果、戦闘美少女像の変容とその過程を、印象批評的な次元を越えて的確に整理している点は、実証性の点でも高く評価される。おそらくは、本邦初のライトノベルに関する博士論文である本論文は、課題に意欲的に取り組んだものとして学術的功績の点で意義があり高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。